

(四) 本國の使と共に歸らむと請ふ啓

朝はまだ底冷えのする二月下旬に長安を発ち、空海は一日行程で「驪山」の温泉に到着した。往路はまったく温泉気分もわかず玄宗と楊貴妃の愛の離宮に目をやる暇とてなかったが、帰国最初の夜空海はここでゆっくりと温泉につかり「虚しく往いて実ちて歸る」法幸をじっくりと味わったであろう。

「華清宮」はもともと帝王と愛妃の離宮としてあるいは皇帝の保養地として重用されてきた。西周の幽王はここで寵妃の褒姒と遊興し、秦の始皇帝はその身体を癒し、唐の玄宗は七四七年に宮殿を建て、秋から春の離宮として楊貴妃との悦楽の日を送った。

楊貴妃は七一八年蜀州の官吏の楊家に生れ、楊玉環といった。生来の美貌により、十六才にして後宮に入り玄宗の子の妃となった。七四〇年、玄宗が華清宮に滞在中に宦官の薦めで召された。美貌の上に聡明でまた歌舞音曲にすぐれていたため、玄宗はすっかり玉環に心を奪われ、目を追って寵愛するようになった。七四五年には皇后に次ぐナンバー2の貴妃として遇されるようになり楊貴妃と呼ばれるようになった。玄宗は毎年秋から春の間この「華清宮」で楊貴妃と過ごすようになった。

白居易（白樂天）は、この玄宗と楊貴妃の「華清宮」での日々を長恨歌にして残した。

漢皇色ヲ重ンジテ傾国ヲ思フ、御宇多年求ムレドモ得ズ。

楊家ニ女有リ初メテ長成シ、養ハレテ深閨ニ在リ人未ダ識ラズ。

天生ノ麗質ハ自ラ棄テ難ク、一朝選バレテ君王ノ側ニ在リ。

眸ヲ回シテ一笑スレバ百媚生ジ、六宮ノ粉黛顔色無シ。

春寒クシテ浴ヲ賜フ華清ノ池、温泉水滑カニシテ凝脂ヲ洗フ。

春宵短キヲ苦シミテ日高クシテ起ク、此レ従リ君王早朝セズ。

歡ヲ承ケ宴ニ侍シテ閒暇無ク、春ハ春遊ニ従ヒ夜ハ夜ヲ専ラニス。

後宮ノ佳麗三千人、三千ノ寵愛一身ニ在リ。

姉妹弟兄皆土ヲ列ネ、憐ム可シ光彩ノ門戸ニ生ズルヲ。

遂ニ天下ノ父母ノ心ヲシテ、男ヲ生ムヲ重ンゼズ女ヲ生ムヲ重ンゼ令ム。

驪宮高き処青雲に入り、仙樂風に飄つて処々ニ聞コユ。

緩歌謾舞絲竹を凝らし、日ヲ尽シテ君王看レドモ足ラズ。

•
•
•

ここから五日、天下の險の「潼関」を越え、空海は「函谷関」の上りに入った。「函谷関」は三ヶ所ある。

最も有名で古いのが、洛陽と長安のほぼ中間あたりにある秦の時代の関所である。戦国時代の紀元前三世紀後半、韓や魏など東方の国の兵を防ぐためにつくられたものである。今、「函谷古道」とその周辺に当時の矢倉や望楼などが残っている。

そこから約五kmほど洛陽よりところに魏の時代のものである。紀元三世紀の三国志の時代、魏の曹操が西方の漢中の張魯や蜀の馬超らを攻略するためにつくった。今、烽火台が残っている。

そして一番洛陽よりで洛陽から西方約三十kmのところにあるのが、漢の武帝の代に將軍楊僕がつくったものである。ここにも古道や城門が残っている。

「函谷関」の危険な山道をようやく切り抜けると二日で「硤石」に出る。往路も悪路だったが、狭い上にけっこうな往来があつて馬車も馬上も揺れに揺れ対抗してくる上り下りの馬車がすれちがうのに難儀の連続であつた。

長安を出てから一週間、洛陽の郊外に届いた。空海はまっすぐ「龍門石窟」に向つた。往路は大使らと「大盧舎那像龕」に表敬参拝をした程度であつたが、帰路は密教伝法阿闍梨として是が非にも参拝をしなければならぬ聖蹟がここにあつた。

この龍門には、『大日経』を請来して自ら漢訳し、さらに『大日経疏』を一行とともに著わした善無畏三蔵の眠る広化寺と、『金剛頂瑜伽中略出念誦経』などの『金剛頂経』系の經典・儀軌を唐土にもたらし、それを自ら漢訳した金剛智三蔵の眠る奉先寺があった。

広化寺と奉先寺は、両祖の埋葬後、密教の徒が詣でる聖蹟になっていた。真言伝法の第八祖阿闍梨となった空海は、密宗の学徒として学恩に報ずるほか現在の立場上是が非でも立ち寄り両祖の墓前に香華を手向けなければならなかった。

広化寺は、龍門山（西山）の北の高台にあった。最初その地に善無畏三蔵の遺骸が埋葬され供養塔が建てられた。その後七五八年に三蔵の仏果増進のためそこに広化寺が建立され、以後善無畏の法脈につながる『大日経』系の密教を奉ずる密僧は皆この土になったという。

奉先寺は、唐の高宗の時代の創建といわれ西山で一番古い「古陽洞」の南の高台にあったが、近年まで場所不明であった。今は故地に碑が建てられている。「龍門石窟」中、今、奉先寺といわれている有名な「大盧舎那像龕」のことではない。金剛智三蔵は七四一年洛陽の広福寺で没し龍門に葬られた。その二年後、奉先寺に供養の塔が建てられた。こちらには金剛智に連なる『金剛頂経』系の密教に従う末徒が以後ここに埋葬されたという。

善無畏・金剛智兩祖の墓參を済ませたあと、今度はゆっくり時間をとって壮大な「龍門石窟」寺院を拝観した。ここは、敦煌の「莫高窟」や大同の「雲岡石窟」とともに中国の石窟寺院を代表する仏跡であった。伊闕の谷、伊水（河）の兩岸に、北魏の文帝時代から隋・唐さらには北宋にかけて造営された巨大な石窟群が展開している。当初は「伊闕石窟寺」と呼ばれた。

北魏時代からの石窟がある龍門山（西山）には、千三百余の洞と八百近い仏龕（木製の石窟の厨子のなかに仏像を刻んだもの）と、四十からの仏塔と九万七千余の石仏と三千七百にもなるうという石碑の大半があった。

空海は先ず、「大盧舎那像龕」に向ったであろう。今は「奉先寺洞」といわれている。この洞は、「龍門石窟」でも最大級のもので、岩山の山腹に幅三十三・五m、奥行三十八・七m、高さ四十mの巨大なドームを掘り、正面中央に伊水に臨み高さ十七mからの盧舎那仏が坐し、迦葉・阿難の二大仏弟子と二菩薩・二天王・二力士の合計九体の大尊像が刻まれている。唐の高宗の勅願によって、六七二年に開削され三年九ヶ月を要したという。

次に「大盧舎那像龕」のすぐ南にある「古陽洞」を拝観した。北魏の時代に造られたドーム型の最古の大石窟である。正面二段の台壇に釈迦如来像が坐り、その両脇に脇侍の菩薩像が対向して立っている。左右の壁には、三層に分かれて大きな仏龕があり、この洞の

全体に多数の小さな仏龕が彫られている。この洞に隣接するやはり北魏時代の「火烧洞」「石窟寺」、さらに南の「極南洞」にも足を運んだ。

今度は逆戻りし、やはり北魏時代の「魏字洞」「普秦洞」「蓮華洞」を拝し歩き、なお唐代の「惠簡洞」「獅子洞」「万仏洞」と、飽かず中国人の秀でた石工技術と仏教美術と信仰心に心を打たれながら拝観しつづけた。

北側の「寶陽洞」にも寄った。「寶陽洞」は今は三洞（南洞・中洞・北洞）あるが、この時は北魏時代の中洞だけであつたらう。中洞には前かがみの巨大な釈迦如来を中心に兩脇侍菩薩と迦葉・阿難の二大弟子の五体が刻まれている。壁面には「維摩變」「佛本生故事」「皇帝礼佛圖」「皇后礼佛圖」「十神王像」が刻まれている。このうち「皇帝礼佛圖」「皇后礼佛圖」は革命後に盗掘に遭い、今ニューヨーク（メトロポリタン美術館）とカンサス（ネルソン美術館）にあるという。

次いで対岸の香山（東山）に回った。こちらには龍門山（西山）の方が彫り尽くされたため、唐代に開削された「看經寺洞」や三洞からなる「擂鼓台洞」や「大万五仏洞」など、七つの窟がある。

空海は「大万五仏洞」南洞に坐す触地印に住する大日如来を仰ぎ見て感嘆した。真うしろの対岸には「大盧舍那像龕」の盧舍那仏が対峙していた。

空海は龍門で二人の祖師に報恩謝徳の誠をささげ、石窟寺院の雄壯巨大な仏教美術を堪能し、勇躍して洛陽に入った。

洛陽では何よりも先に善無畏三蔵が『大日経』を漢訳した大福先寺に参じた。奈良の西大寺で最初に天平写本の『大日経』を拝した時、よもやその訳経の故地に足を踏み入れることなど想像もできなかった。つい半年前惠果に従ってその内奥も極めた。空海は『大日経』の感慨を胸に大福先寺の山門をくぐったであろう。しかも、大安寺の栄叡・普照の努力によつてこの寺から日本に渡つた道璿が東大寺大仏開眼の呪願師をつとめたことも、その道璿の紹介によつて鑑真以下の律僧が日本に招かれることになつた事情も承知していた。

洛陽で、空海は郊外の白馬寺にしばし留まつたものと思われる。白馬寺は中国仏教史上最古の仏教寺院である。紀元一世紀の中頃、後漢の明帝が夢のなかで「金人」（金色の仏）を見て仏法に帰依し、十二名の使いを大月氏国に派遣し仏典を求めさせた。大月氏国は中央アジアのトルコ系遊牧民族だつた月氏が紀元前二世紀の後半アフガニスタン北部に展開していた大夏（トハラ（トカラ）族）を征服して建国をした国であるが、その頃は旧大夏の部族のなかから貴霜（クシャーナ）翁候がほかの四部族を統一し、東アフガニスタンから北部パキスタンさらに北西インドを征してまもなくのカドフィセス一世の時代であつただろう。

明帝の使いが行ったのはインド仏教の聖地ガンダーラ地方だったに相違ない。ガンダーラはもともと北西インドに栄えていた王国であり、紀元前時代から仏教が盛んであった。インド・グリーク王朝時代のメナンドロス一世とインド僧のナーガセーナの間答『ミリンダ王の問い』は漢訳仏典の『那先比丘経』として今も残っている。またガンダーラは、紀元二世紀の頃仏教への帰依の厚かったクシャーナ朝第四代カニシカ王の時に絶頂期となり、ギリシャ・ペルシャ・シリア・インド等の美術様式を融合した仏像や石工レリーフなど多くの仏教美術を誇った。

それから三年経った紀元六七年、撰摩騰と竺法蘭という二人のインド僧が仏典『四十二章経』と仏像（金人）を白馬の背に載せ洛陽に來た。明帝は夢がかなって大いに歓喜し中国初の仏教寺院を建立し「白馬寺」と名づけた。『四十二章経』は撰摩騰と竺法蘭が訳出した最初の漢訳仏典といわれているが、そのなかに明帝が大月氏国に使いを送った記述があり、南斉から梁にかけての後代に中国で考案・編集されたものと考えられている。

白馬寺の住持は空海のために一室を用意し数日を過ごさせてくれたであろう。住持は空海を撰摩騰と竺法蘭の墓所にも案内し、伝来当初の仏教についていろいろな逸話を話してくれたと思われる。空海は、唐代にインドや中央アジアを出自とする高僧が大乗や密教の經典・儀軌を唐土にもたらしその漢訳にもつとめた例をいくつも知っていたが、すでに紀

元後すぐから帝王自ら仏典を西方に求める動きがあったことや、仏典がこの国にもたらされるには仏教発祥国のインドを中心にギリシャ・イラン・パキスタン・アフガニスタン・シルクロード周辺の広範囲で興亡する王朝や民族間の動向が深く関与していることを思い知った。そして、恵果から受法した「金胎不二」の密教が、空間軸でいえばアジアのほぼ全域を包含し、時間軸でいえばその地域の国々の歴史や仏教の歴史を内包する国際的なスケールの宗教であり、それらが皆今わが一身に摂受されていることに改めて誇りと幸せを感じたであろう。今、白馬寺の境内に空海大師の像が建っている。

洛陽は、中国を代表する古都の一つであった。たびたび王朝の首都となり、盛衰をくり返してきた。春秋時代が始まる紀元前七七〇年、(西)周の第十二代幽王が自らの乱脈悪政により諸侯の信頼を失い、犬戎(周辺遊牧民の一派)にも攻められついに驪山で殺されてしまった。その後、太子の宜臼が即位して平王となり、都を長安近くの鎬京から雒邑(洛陽)に遷した。

紀元後一世紀から三世紀前半の後漢(東漢)の時代また都となり、以後三国時代の英雄曹操を初代の王とする曹魏、司馬炎が建国した西晋、そして華北を制した北魏、三百年ぶりに分裂国家を統一した隋、そして後唐の都となった。空海が滞在した頃の洛陽は長安に劣らぬ大都市で、城内のそちこちに名所旧跡を残す古都であっただろう。

空海はこの洛陽で数日を過し、もう一度善無畏三蔵ゆかりの大福先寺に表敬し別れの挨拶をした。住持はその日も懇慫に迎え、別れ際に大変苦渋に満ちた言い方で意外なことを願い出た。まもなく密教が廃される危険が迫っているため、この寺に所蔵されている密典を預って欲しいというのである。その真剣な態度に心を打たれ、空海はその夜を大福先寺で過し経巻を点検した。密教の伝法阿闍梨として断れない緊急判断であった。翌日、たくさん密典を馬車に積み洛陽を辞した。判官らは、空海の立場がもはや留学生を越えていく現実を、ようやくわきまえられるようになり、空海だけは特別行動を許可されるようになった。

●本文…留住學問僧空海啓 某器乏楚材 聰謝五行 謬濫求撥 涉海而來也 著草履

歷城中 幸遇中天竺國般若三藏 及內供奉惠果大阿闍梨 膝步接足 仰彼甘露

遂乃 入大悲胎藏金剛界大部之大曼荼羅 沐五部瑜伽之灌頂法 忘滄耽讀 假寐書

寫 大悲胎藏金剛頂等 已蒙指南 記之文義 兼圖胎藏大曼荼羅一鋪 金剛界九會

大曼荼羅一鋪 竝七幅丈五尺 并寫新翻譯經二百餘卷 繕裝欲畢 此法也 則佛之

心 國之鎮也 攘氛 招祉之摩尼 脫凡 入聖之虛徑也 是故 十年之功 兼之四

運 三密之印 貫之一志 兼此明珠 答之天命 嚮使 久客他鄉 引領皇華 白駒

易過 黃髮何爲 今不任陋願 奉啓不宣謹啓

書き下し…留住學問の僧空海啓す。某、器楚材に乏しく、聰さ五行に謝す。謬つて求撥

を濫にし、海を渉つて來たる。草履著け城中を歷るに、幸いに中天竺國の般若三藏及び

內供奉の惠果大阿闍梨に遇い、膝步接足して、彼の甘露を仰ぐ。遂いに乃ち、大悲胎藏

金剛界大部の大曼荼羅に入り、五部と瑜伽の灌頂法に沐す。滄を忘れ讀に耽り、假寐し

て大悲胎藏金剛頂等を書寫す。已に指南を蒙り、之が文義を記す。兼ねて胎藏大曼荼羅

一鋪、金剛界九會大曼荼羅一鋪を圖し（竝に七幅丈五尺）を圖し、并せて新翻譯の經二百餘卷を寫し、繕裝して畢らんとす。此の法は、則ち佛の心、國の鎮なり。氣を攘い社を招く摩尼、凡を脱し入聖に入るの捷徑なり。是の故に、十年の功は、之を兼ねること四運、三密の印は之を一志に貫く。此の明珠を兼ねて之を天命に答う。嚮て使いし久しく他郷の客となり、領を皇華に引く。白駒は過ぎ易く、黄髮は如何せん。今、陋願に任えず。奉啓不宣、謹しんで啓す。

私訳・留学生の僧空海が申し上げる。小生、器としては佳い素質が乏しく、聰明さについては書物を読むのに五行を一度に読む応奉になど及ぶべくもない。心得ちがいをして仏・菩薩が本所に帰る撥遣と同じこと（入唐留学）をみだりに求め、海を渡つて来た。草履を足につけて（師を求めて）長安城中を歩きまわったところ、幸いに中インドから来た般若三藏や宮中の内供奉禪師惠果大阿闍梨に遭うことができ、ひざまずいて進みその足に頭をつけて拜礼（頂礼）し、その密法を仰ぎ見た。すると時をおかず、胎藏界と金剛界両部の大曼荼羅に入り、五部（金剛界）と瑜伽（胎藏界）の灌頂受法という栄

に浴した。(そして) 食事も忘れて経軌を読み耽り、うたた寝が出るほど疲れながらも『大日経』『金剛頂経』関連の経軌を書写した。さらに指導を受けて両経の内容について書きとどめもした。同時に、胎藏生曼荼羅と金剛界九会曼荼羅を各一鋪を画き、合せて新訳の經典二〇〇巻余りを写経し、表装し終ろうとしている。この密法は仏教の心髄であり鎮護国家の基である。災いを払い幸いを招く摩尼宝珠であり、凡夫の輪廻を解脱して仏・菩薩の道に入る近道である。そうであるから、在留二十年の修学義務を一年に兼ねさせ、三密瑜伽(密法)で一筋の志を貫いた(密教を受法し終えた)。この明るく磨かれた宝珠(密法)はすべて天皇の勅命(入唐留学)に答えるものである。かねて留学生になって長く他国の客となり、(すでに)首を長くして次の勅使(帰国する遣唐使団)を待つ身になった。日月の過ぎるのは速く、髪が黄ばんだら(老いれば)如何ともしがたい。(だから)今、卑しい(とは思いつつ)願い出を提出する次第なのである。奉啓不宣。謹しんで申し上げる。

※註記1..楚材は、楚が木の幹からまっすぐに伸びた枝(すわい)で、楚材はすぐれた材。

※註記2..五行は、「応奉五行」(『蒙求』という故事伝にあり)という故事で、漢代の汝南郡の官人の応奉という人は、書物を読むのに五行を一度に読んだという、聡明さの象徴。

※註記3..謝は、去る。及ばない。

※註記4・・求撥は、撥が「撥遣」、の意。念誦法で召請した仏・菩薩等を本所に送ること。
ここでは、長安（青龍寺）を本所としてそこに派遣されること。|| 求法。

※註記5・・内供奉は、宮中で天皇の近くに仕え、内道場で国家安穩・玉体安全を祈禱し、
天皇の看病なども行う仏教僧。

※註記6・・膝歩は、ひざまずいたまま歩行すること。

※註記7・・接足は、仏や高僧の足元に頭をつけて拝礼すること。

※註記8・・甘露は、密法。

※註記9・・假寐は、うたた寝。

※註記10・・繕装は、表装。

※註記11・・氛は、災い。

※註記12・・凡は、凡夫、衆生。

※註記13・・聖は、仏・菩薩。

※註記14・・捷徑は、近道、の意。原文の「山」偏に「虚」と書く字がPCフォントには
ないため、近道という意味で「捷」を補なった。

※註記15・・十年は、二十年の誤り。日本の朝廷が定めていた留学生の修学期間。

※註記16・・四運は、四時||春夏秋冬、一年。

※註記17・・明珠は、名月のように明るく磨かれた宝珠。密法の喩え。

※註記18・・皇華は、天皇の使者、遣唐使。

※註記19..白駒は、月日、歲月。『莊子』知北遊篇の、人の一生は白い馬が壁のすきまを
通り過ぎるくらいの長さに過ぎないという喩え。

※註記20..黄髮は、年老いて髪の毛が黄ばむこと。

※註記21..陋願は、卑しい、心の狭い願い、の意。